



第2号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447：TEL 0566-41-8522
 ：FAX 0566-41-7761



熱弁中の梅原猛名誉村長

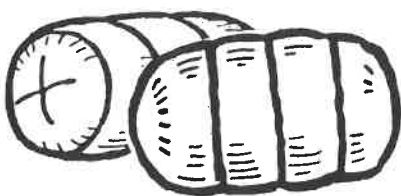
平成六年二月六日(日)午後二時より碧南市芸術文化ホール内シアターサウスにて、哲学たいけん村無我苑名誉村長梅原猛先生の特別講座が開催されました。

御高名な梅原先生の講演とのことで、会場は予備席もぎっしりの満員で、市内はもとより、名古屋、知多市、東海市、刈谷市、安城市、西尾市等近隣諸市より数多くの方々が参加下さいました。又、年令層も高校生から八十才代の方までと幅広く参加して頂き、活気あるものとなりました。

講座終了後のアンケートも半数近くご回答を頂きました。そしてその大部分が、「大変良かった」という感想です。梅原先生のユーモアを混じえた若々しい情熱的な話しぶりや、その源となる探求心や想像力に、聴衆の皆さんはすっかり魅了されたようです。

今後も、多くの皆さんの要望に応えられるよう、深く心に根ざした哲学たいけん村にふさわしい行催事を計画したいと考えています。

次頁に、梅原先生の講演の要約を掲載します。



哲学たいけん村無我苑新春特別講座

「米の文明と日本」

講師 梅原 猛氏

国際日本文化研究センター所長
哲学たいけん村無我苑名誉村長

本日の演題に「米の文明と日本」という題を出しておきました。今まで私は米文明というのをどう考えていたかといえますと、米だけで日本を考えるのは間違いだ、日本は弥生文明（米文明）の向う側に縄文文明（狩猟採集文明）がある。

この二つの文明が楕円的に調和しているのが日本であると考え、今まで日の目を見なかつた狩猟採集の文明に光をあててきました。そして基層文明としての縄文文化の影響が意外に多いのだということとを強調してきました。日本を代表する食物は、寿司であり、ヨーロッパを代表するのは、パンとバターです。パンは小麦農業、バターは牧畜であり、ヨーロッパ文明がこの二つを基礎としてできあがっているのに対し、日本の文明は下の方に米（弥生文化）があり、上には生魚（漁撈採集の縄文文化）があるわけです。私はこの縄文文化に関心を持って、弥生文化には関心がいかなかったのです。



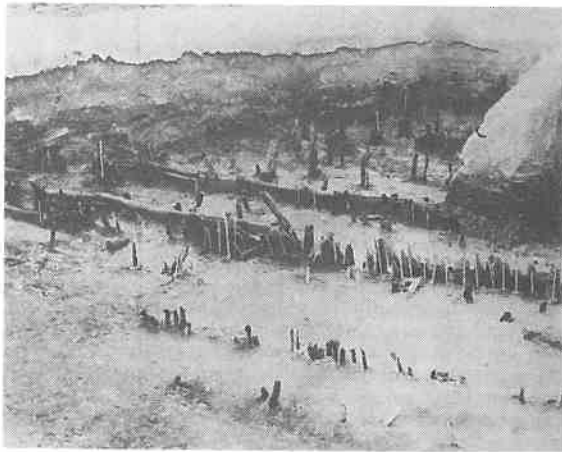
中国江南農業遺跡の旅 河姆渡遺跡

ところが、昨年、にわかには弥生文化に関心が移りました。昨年七月に浙江省の杭州にある河姆渡遺跡を見てびっくりしました。なぜかという、これは今から七千年前の米農業の遺跡なのです。

米文明は、五千年位前に中国の雲南省、インドのアッサム、ネパールの山岳地帯でおこったと推定されてきました。それが中国江南地方に三千年位前に伝わり、それから千年後に日本に伝播したと考えたわけです。ところが、この河姆渡遺跡によって七千年前にこの江南の地に米文明のあったことがわかりました。この遺跡は、住居遺跡で中から洪水のときに埋まつたらしい稲の束がキラキラ輝いて出てきた。その稲は、ジャポニカ、インデイカに分かれる以前の米のようでした。さらに、彩色土器で抽象的な模様のあるすばらしい黒陶が出ますし、それに蚕と思われる文様が描かれていること

からシルクがあつたと考えられます。それから、水牛の骨器（鍬）や玉器も出てきている。骨には、ゾウ、ワニ、トラ、ヒヨウ、サイ、ヘビなどもあります。それで、揚子江沿岸には、うっそうたる森があつて、そこにはたくさんの野性の動物がいたことがわかります。初期農業は森の中で起こつたのであり、人々は米を食べ同時にゾウやウシの肉を食べていた。それから二千年後の遺跡にはこうした動物の骨はみあたりません。人間が食べ尽くしてしまつたのだと思います。

そして農業は日本へきて狩猟採集と結びついた。柳田邦男の説によれば、山の神と田の神は一体で、山の神が田植えの頃に田の神となり、収穫とともに山へ帰っていく、これが日本文化だと思つていました。初期農業も同じで、農業というのは本来狩猟採集と一体なのです。そして農業というのは、土器、シルク、骨器、



玉器などの複合文明でもあります。そしてこの時代のシンボルマークとして胸飾りなどに五つの円を二羽の鳥が囲んでいる絵があります。これは宇宙は全部循環だという思想で、この思想は日本文明の原理でもあります。五つの同心円は循環で後の五行思想につながっています。それを囲む鳥はこの世とあの世の使いで、生まれ変わりを表しています。これが稲作農業の思想です。

羅家角遺跡

私はこの河姆渡遺跡を見て大変感動して、もっと農業遺跡を見たいと思つて、それで昨年末に浙江省を再び訪れました。その折に羅家角遺跡にも行きました。ここは河姆渡と同時代の遺跡ですが、稲作をしている田んぼの遺跡のようでした。ここにも、彩色土器、骨器、玉器等が出土します。その土地は黒土の湿地帯です。ここも七千年前ですから今まで信じてきた雲南に五千年前に稲作が起こつて三千年前に江南に達したという説は、成立しなくなり、流れは逆だつたということが出てきました。

私はこういう農業遺跡が出てきたからにはこの上に都市文明があつたと予測した。どうしてかという、小麦と牧畜の文明は一万二千年前にイスラエル地方に始まりました。その文明のもとに、今から五千年前にメソポタミア地方に都市文明が起こつた。最初の王国はシュメールの王ギルガメッシュが始めた。巨大な城

壁、巨大な神殿、宮殿、文字、国家・これらが文明のしるしです。

中国を考えると、七千年前に始まっているが、これが最初だとは思えない進んだコンプレックス文化です。もっと発掘が進めば、一万年前や一万二千年前の遺跡がでるかもしれません。豊かな生産がおこればそこには都市文明ができるに違いないと考えました。

良渚遺跡

杭州の少し北に良渚遺跡があります。そこに大観山という丘があります。東西六三〇m、南北四五〇m、高さ六〜八mのほぼ四角で、自然の山だと考えていました。が、そうではなく、日本の古墳のように土を固めて作る版築工法で作られた人工の山であることがわかりました。

周囲には四〇余りの作り山があり、そのうちのひとつに反山がある。この辺りは昔から玉がでる。盗掘に合い日英に流れた。それは漢代の玉で、二千年前の玉とされていた。ところが、十五年程前に放射性炭素測定値で調べたら五千二百年から四千三百年前のものであることがわかりました。そうすると中国の歴史の見方がまったく変わってきます。反山を開墾の為に掘ってみたら、一つの墓から一〇〇以上の玉器が出てきた。(方柱状の器体に円孔を貫通させた)「琮」や(円盤状で中央に円孔の穿たれた)「璧」などが代表的なものです。「琮」は〇と□の組み合わせで天と地を表す。天と地の交わる

この世の支配者のシンボルでしょう。「璧」は鏡のようなものに孔があいているものですが、これは靈器として貴重なものであった。お墓はまだ二つしか発掘されていません。私は、中国が主体となって日本が技術や資金援助をして、発掘しましょうと提案、やりましょうということになりました。

この時代、中国の北ではまだヒエヤワを作っていた。これに比べれば米の方がずっと生産力が高く、豊かな生産力は必ず高い文明を生み出すものです。この大きな版築は秦の始皇帝の時に一つだけ作られているが、それさえも二千五百年も後のことです。

(反山の)版築はおそらく政治の中心地でアクロポリスのようなものだったと思う。政治形態はよくわからないが、玉器の文明です。玉器ほど中国人が大事にしたものはない。孔子は玉を誉めたたえている。この近くに五千年前の農業遺跡がある。この遺跡には骨器がない。その代わり玉器が増えている。玉器の文明はギリガメッシュの作った文明と違い大変平和的な文明であったと思う。そして木の文化で宮殿は木造であった。しかし、この文明は四千二百年前で消えてしまう。なぜこの文明が減んだのか。中国の歴史書「史記」に中国第一代の王、黄帝が炎帝と協力して越の蚩尤を滅ぼしたと記されているが、この蚩尤の国が良渚遺跡ではないかというのが私の閃きなのです。時期も黄帝の玄孫が堯、堯の後が舜、舜の後が禹でこの禹が夏王朝を始め、それが四千年前というので禹の七代前の皇

帝といえは四千二百年前で時代も合います。中国では三千年前の殷から大文明が出てくる。殷の遺跡は安陽にあります。中国は江南の稲作文明を北方の小麦農業プラス牧畜民が征服して王朝を作った。それ以来北方文化が延々と続いている。この文明は青銅器文化です。



H6.2.17 中日新聞より

米文明が 文明を作る

大観山には至る所に焼け跡があり、宗教的なものとされていますが、私は焼き討ちに合ったものだと思う。もし私の考えたとおりだったとすると米文明が文明を作ったわけです。今までは米農業は文明を作らないというのが世界の常識であった。世界の四大文明はすべて小麦農業だったからです。実は違う。その前に中国では米農業が文明を作った。その米の文明は玉の文明であり陶器は玉を真似ようとしたものです。玉の「琮」には人と竜の顔に鳥の足が描かれた絵があります。これを饗餞文(とうてつもん)といい、青銅器にうけつがれていきます。さらに

漢代の陶器にもつけられているというところは、中国文明は米文明から発しているということ。儒教では礼を重んじます。礼の原形は良渚文化にあり、玉器は礼器として受け継がれ、孔子の礼の思想へと発展します。青銅器文明が玉器を真似ている。長い間青銅器の文様の意味がわからなかったけれども今度初めてわかりました。日本では縄文文化が基層となっているように中国では稲作が基本だということがいえます。この稲作文化は多分に狩猟漁撈文化の名残りを残している。それはアニミズムであり、動物をたくさん食べてその力を借りて強くなる。この文化を北方からきた文化が滅ぼして今の中国ができた。中国というのは稲作と小麦農業という二つの楕円的な文明です。表面を支配しているのは小麦文明ですが、裏で支配しているのは稲作文明です。今の中国は江南地方の米の余剰生産をバックにめざましい発展をしています。

和の精神で アジアの連帯を

今、米の問題がシビアになった時、稲作が生んだ巨大な文明が出現したということは大変大きな意味を持っていると思います。中国、韓国、ベトナム、シンガポール、台湾、日本もみんな稲作文化圏です。この稲作文明がどう生きるか重大な時期にさしかかっている。今、米の文明でアジアの協同体を作れというのが私の考えです。ヨーロッパはヨーロッパでアメリカ

はアメリカで助け合っている。アジアはアジアで将来世界の中でどう生きたらいいのかという話し合いをすべきだと思ふ。

日本の文化の特徴は弥生と縄文の両方です。稲作文化の中から非常に優れたものがでてきた。それを捨ててはいけません。それでアジアの連帯性を強めて、これからどうするかをよく相談しなくてはならない。助け合わなくてはならない。そのことは決して世界の対立を増すことなく、解決へと導くことになると思う。

なぜなら稲作文化の特徴は小麦文化よりはるかに自然破壊が少ない。稲作は和の精神です。これからの世界には和の精神、和の文化が必要であると思ひます。

ハイビジョンギャラリー

新作ソフト

「油ヶ淵 24 時」の紹介

愛知県最大の自然湖沼、油ヶ淵の四季折々の表情を朝から夜までハイビジョンカメラで一日の様子を撮影した作品です。

水鳥、昆虫、植物など油ヶ淵に生きづく様々な生命、古くから言い伝えられてきた竜燈伝説などを映像化し、小さな生命の存在や自然の大切さ、ふるさとのすばらしさを心の底にいつまでも残していただきたい作品です。ぜひご覧ください。

(上映時間 約十分間)

平成 6 年度 涛々庵茶会席主

月日	氏名 (茶名)	流派	月日	氏名 (茶名)	流派
4. 24	杉浦 とめ (宗登)	久田流	10. 23	安形 亮照 (宗照)	裏千家
5. 22	小笠原 利 (宗紅)	裏千家	11. 27	中村 知静 (宗静)	表千家
6. 26	石原 応順 (宗応)	表千家	12. 18	山崎 瑞枝 (宗瑞)	裏千家
7. 24	岩月みつ江 (宗満)	宗偏流	1. 22	小島 和美 (宗美)	裏千家
8. 28	水野二三四 (宗慶)	裏千家	2. 26	小沢さわ子 (宗和)	松尾流
9. 25	樺山しづ子 (宗清)	松尾流	3. 26	磯貝 勝代 (宗代)	裏千家

平成 6 年度

第四回

哲学講座のご案内

哲学たいけん村無我苑では、四月二十三日(土)より五回にわたり第四回哲学講座を開講致します。

今回は、近代日本の思想Ⅱとして、(1) 西田幾多郎以前(2)西田幾多郎『善の研究』



(3)同『行為と直観』(4)和辻哲郎『風土』(5)同『人間の学としての倫理学』という内容を講義していただきます。

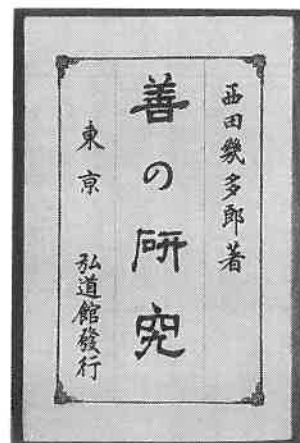
西田、和辻両氏は、近代日本の最も代表的な思想家であり、その著作は近代日本の思想の原点ともいうべきものです。

特に『善の研究』は、近代日本人による日本最初の哲学書といわれ、『風土』は人間の精神の風土性を世界的視野で論じた名著といわれています。そして、これらは哲学のみにとどまらず、文学、思想、宗教などその影響は大きな広がりをもって今日にまで至っています。

慣れない哲学用語や理論的な説明も多く、とりつきにくい面もあるかもしれませんが、せんが、講師の先生方のご指導を得て、現代に生きる私達にとって意義深い講座にしたいものです。

西田幾多郎(一八七〇〜一九四五)
昭和五年(一九三〇)八月、六十歳当時の西田幾多郎。昭和三年に京都帝国大学(今の京都大学)の教授を停年退官、文学博士の学位を受けた。
その二年後の幾多郎。

明治四十四年(一九一一)一月、弘道館より刊行された『善の研究』の化粧扉。



和辻哲郎
夏目漱石門下のころ
(一八八九—一九六〇)



善とは一言にていへば
人格の実現である

『善の研究』
第三編第十三章
(完全なる善行)